

斎藤報恩会と郷土史研究

菅 野 正 道 (仙台市博物館学芸普及室長)

仙台市博物館の菅野です。本日は宜しくお願いします。

今日は、斎藤報恩会と郷土史研究というテーマでお話いたします。仙台における郷土史の基本資料といえば、宮城県図書館に入っている資料、それから私が勤務している仙台市博物館で所蔵している資料、そしてもう一つ大きな柱となるのが、今日お話をさせていただく斎藤報恩会で所蔵している資料ということになります。中でもこの報恩会が集めた資料は、収集さ

れた時期が最も古いと言っても過言ではないかと思えますし、分野も様々多様な方面から成っております。

さらに斎藤報恩会は、そういった郷土資料を収集するというだけではなくて、郷土史も含めた日本史研究、歴史も含めた人文学研究にも多大な助成を長年にわたって行ってきました。昨年、報恩会が解散するというにあたりまして、そこで長年蓄積をされました郷土資料、歴史資料のほとんどにつきましては私共の仙台市博物館にご寄贈いただきました。これは仙台にとって、あるいは宮城県にとって、日本にとって非常に重要なものを私共の博物館でお預かりさせていただくということになりまして、私共としても感慨深いものがあります。

こういった大事なものを仙台市博物館にご寄贈いただくことになりましたので、そのお披露目の展覧会を是非行わなければならないだろうということで、この十一月十一日から約二ヶ月間、企画展を開催いたします。斎藤報恩会からご寄贈いただいた郷土資料は、後でもお話申し上げますが、数千点に及んでいます。ただ、私共の博物館の展覧会は、例えばつい先だってまで水墨画の展覧会を行っていましたが、こういった特別展、企画展で展示できる資料は、展示室の広さから一五〇点から二〇〇点くらいに限られております。ですから今回の展覧会でも皆さんにご覧いただけるのは、報恩会からご寄贈いただいた資料のごくごく一部です。ただその中でも選りすぐりのものを皆さんにご覧いただきたいということで、皆さんのお手元の方にもチラシを配らせていただきましたが、企画展「戦国の伊達 政宗の城 仙台の町」というタイトルの展覧会を企画したところです。ぜひご観覧ください。

そして、この企画展を準備する段階で、東北大学史料館とは何か一緒に同時並行でできないだろうかということをお話しさせていただいて、ほぼ同時期に展覧会を開催することができました。また合わせて、こういった形で、今日この場で報恩会の業績についてお話をさせていただく機会をいただいたことを、本当に私としてもありがたく思っているところでございます。

先ほど米澤先生から、報恩会が設立された経緯ですとか、その後の学術助成の状況といったことをいろいろお話をいただきました。詳しくは皆さんにも配布されている『斎藤報恩会のあゆみ』という冊子に、どういった研究にどれくらいの期間、どの程度の助成がなされていたのかという



ことが詳しく記されていますので後でご覧いただければと思います。ざっと見ていくと、やはり学術助成の中心は、自然科学に対するものが多くを占めていると言って間違いないだろうと思います。これは自然科学が他分野にわたっているということもありますし、現在もそうですが、どうしても人文科学に比べれば、多大な研究の経費を必要とします。私が大学を卒業してから随分経つのですが、昔聞いた話では、やはり工学部、理学部では研究室の予算が数千万円とかという一方で、日本史の研究室は学生、大学院生が使う本を買うような経費は、桁が二つ三つ違っていたようです。そんなこともあって、金額の多い、少ないということで、報恩会が人文科学を疎かにしていたということにはならないものと思います。報恩会が行った人文科学に対する学術助成は、歴史、仏教、文学、経済、あるいは教育や法学と、非常に多様な分野に及んでいます。今日はその中で、特に私が関係している歴史、郷土史の分野について、斎藤報恩会というのは非常に大きな役割を果たしてきたということをお話をさせていただきます。

1 郷土史研究への寄与

郷土史に関連しては、早くから資料の収集ですとか、東北大学を含めた研究者への助成を斎藤報恩会は行ってきました。中でも注目されるのが、仙台郷土研究会への助成です。昭和五年(一九三〇)に設立され、今も続いている仙台的郷土史に関係するこの団体が設立されますと、当初から報恩会はその活動に多くの有形、無形の支援を与えております。

また、皆さんの前に写真を映しております。この方は小倉博という方ですが、仙台で「小倉兄弟」という有名な一家の一人でした。仙台の南、長町という所の旧家で、江戸時代には名取郡の大肝入をやったりした家の出身でして、国文学者ということで知られている人物です。後でまた詳しく説明をさせていただきますが、この小倉博が昭和六年に斎藤報恩会の博物館学芸員、それから図書部の主任という職に就いてから、斎藤報恩会は仙台における郷土史研究の中核的な存在になっていきました。

小倉博が斎藤報恩会に奉職して二年後の昭和八年には、現在の錦町公園の隣に斎藤報恩会館という建物が造られます。そうしますとこの会館は、報恩会の事務局があると同時に様々な自然史の資料、歴史の資料、これを収蔵して展示をするという博物館がその中に設けられました。この昭和八年に報恩会館が出来上がって博物館がオープンした時、最初は観覧料を無料としたそうです。そうすると、展示を観覧に集まった人が、なんと四日間で五万人にのぼったのだそうです。今、私共の仙台市博物館では、大きな特別展をやって、一日二千人入るとかなり混んできたという感じで、三千人になってくるとがやがやと展示室の環境が悪くなり、五千人になってくるとチケットを買うところで行列ができたり、あるいは展示室の中に入るのに入場制限をやったりと大混雑になります。それが四日間で五万人ですから、一日一万人を超すんですね。これは一体どんな騒ぎになっていたのだろうか、私のような博物館に勤めている人間からすると、とても信じられない状況に思えます。たくさんの方がこの博物館を観覧に集まったのは、その当時の仙台には常設の博物館というのがありませんでしたので、仙台の人たちがこの斎藤報恩会の博物館に対する期待の大きさを物語っている、ということが言えると思います。

この斎藤報恩会博物館では、先ほど申し上げました通り、多くの自然史関係の資料、例えば標本などを収蔵、展示すると同時に、郷土史関係の展覧会の開催や資料の収集といったものを盛んに行っておりました。主なものとしては、この開館した昭和八年に行われた「仙台開府時代資料

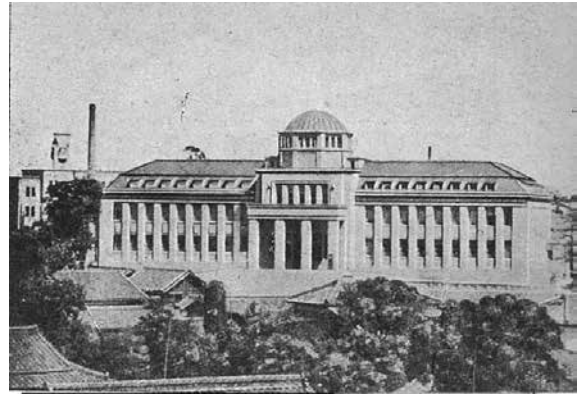
展覧会」、それから昭和十年に開催された「伊達家蔵品展覧会」と「仙台絵図地図展覧会」といったものがあります。ここでも昭和十年五月に開催された「伊達家蔵品展覧会」のことを紹介しますと、五月ほぼ丸々一ヶ月展示をしていたようですが、新聞記事によると一ヶ月での入場者が十四万七千人ちょっとだったそうです。約十五万人ですので、休館日が会期中にあったかどうかまで調べがつかなかったのですが、五月全日展示をしていたとして三十日ですので、一日五千人の観覧者があったということになります。

ちなみに、斎藤報恩会では陳列室と呼んでおりますが、今で言えば博物館の展示室ですね。その写真を見ると、通路の両側にガラスケースがあるので、非常に狭い状況ですね。ですので、こういうところに一日五千人とか押し寄せたらどんなことになるのかなと、本当に信じられないような状況ですね。

伊達家に伝来した文化財については、今でこそ私共の仙台市博物館で常に何らかのものはご覧いただける状況になっておりますけれども、かつて戦前の段階では、十数年に一回に開催される博覧会だとか、何かの記念の時に少し展示をされるくらいでした。ですので、全国でも指折りの大大名である伊達家の文化財がまとまって展示されるということは画期的なことで、多くの関心呼び仙台市内だけではなく、宮城県、東北地方各地からたくさんの人が集まったのだと思います。

このように、戦前のまだまだ博物館といったものが全国的に普及していない中で、この仙台という地方都市で、常設の博物館があつて大きな展示を行っていたということの文化的な意義というのは非常に大きなものがあるのだと思います。またこの報恩会館の中には講堂も設けられておりまして、その講堂を使っているような形の勉強会、講習会、講演会なども行われていたようです。この講堂は三七五人が定員だったようですが、今の仙台市博物館の講堂、ホールの定員が約二〇〇人となっています。ですから、その倍くらいの大きさの講堂を備えていたということも、斎藤報恩会が仙台における学術助成だけではなく、一般市民も対象とした教育、社会教育、今風の言葉で言えば生涯教育というものを広く普及をさせようとした心意気も感じることができるのではないかと思います。

こうした報恩会が行ってきた研究助成、あるいは自主事業による郷土史関係の成果の主なものとしては、阿刀田令造、この人も後でまたお話をいたしますが、戦前の仙台の郷土研究の中では中心人物の一人です。この方の飢饉史の研究ですとか、あるいは宮城県、東北地方の考古学研究の第一人者として知られている伊東信雄。この方は実は考古学だけではなくて、郷土史の研究で



斎藤報恩会館



斎藤報恩会博物館の陳列室

も非常にたくさんの業績を残された方です。この伊東信雄と阿刀田令造らが昭和十年代に、今の滋賀県に中井家という大きな近江商人がおりまして、この家の古文書調査を行っています。中井家というのは、江戸時代半ば以降、仙台に大きな店があり、日野屋新三郎という屋号で知られる仙台城下でも有数の豪商であり、かつ仙台藩の蔵元をやった家でした。その家の資料がたくさん滋賀県に残っているということで、阿刀田令造と伊東信雄らが滋賀に三年にわたって通い、たくさんの仙台藩関係の資料を、筆写してきました。それが基礎資料となり、仙台藩財政の研究が大きく進展することになったのです。

その他にも小倉博が行った奥羽俳諧史の研究ですとか、御国浄瑠璃あるいは奥浄瑠璃と呼ばれるこの地方独特の古い文芸の研究、それから東北帝国大学に勤めておりました日本近世史の古田良一による奥羽海運史の研究や法制史の高柳真三らによる仙台藩法制史の研究、そういったものが報恩会の助成を受けながら進められてきたのです。

そしてこういった研究については、それぞれの研究者が独自に論文を発表する、あるいは著作としてまとめるということもありましたが、同時に報恩会の方でも特に図書部を中心に郷土史関係の研究報告書が発行されていました。その一番最初に出されたのは、昭和九年に報恩会の博物館図書部が作りました『維新前東北地方刊行物解題』で、明治維新の前、すなわち江戸時代に東北地方で出版された本の調査研究を行って、こういったものが出版されていたのかを明らかにしたものです。実は仙台というのは、江戸時代においては日本でも有数の本を出版する都市だったのです。東北地方では、仙台を中心として、その他にも会津や南部では農業の技術書や暦なんかを出版してきた。そういったことも含めて、仙台だけではなくて、広く江戸時代における東北地方の出版状況を研究して、目録と解説、解題を一緒にまとめております。

他にも、小倉博による『御国浄瑠璃集』ですとか、長岡恒喜の『仙台金工之研究』、それから森嘉兵衛の百姓一揆の研究、本田安次による法印神楽の研究などがありますが、特に私たち仙台の郷土史を研究する上で重要な仕事としては、昭和十一年に出版された阿刀田令造の『仙台城下絵図の研究』があります。これは前年に報恩会で開催された古絵図・地図展覧会の成果をもとに行われたものですけれども、仙台の城下町を描いた古い絵図を集めて、その内の幾つかについては大判の付録をつけて、それぞれの絵図の年代、描き方などの研究考察、そして写真版を併せて本にするというようなものでした。仙台城下町研究の基礎となるデータをこの本は紹介をしたということになり、今でも仙台城下研究の基本文献となっています。同時にここに載った仙台城下絵図の半分以上のものが、現在行方がわからなくなったり戦災で失われたりしていますので、その意味でも重要な記録集ということができると思います。

この他、仙台の郷土史の研究と言いますと、必ずお世話になるのが、『仙台叢書』という大正時代から昭和前期に刊行された、仙台の歴史に関係する様々な文献をまとめたシリーズものがありますが、この刊行事業についても「旧仙台藩史料編纂」という名前で、大正十二年から昭和三年にかけて、合計一万三千七百五十円の助成を斎藤報恩会は行っています。大正年間から昭和初期というと、一円が大体今の千円ぐらいの価値に相当しますので、一万三千七百五十円という額は現在の一千万円以上に相当します。この出版助成によって私たち仙台郷土史を調べるものは、非常に大きな恩恵を今でも受け続けているのです。これは仙台の郷土史研究の中で特筆すべき、忘れてはならない、大事な事業なのだろうと思います。

ただ、このように仙台の郷土研究に対して、様々な助成を行ったり、あるいは独自に資料の収

集を行ってきた斎藤報恩会でございますが、第二次世界大戦が勃発すると、当時の日本全体の風潮として、自然科学研究、あるいは工学、医学などの研究というのが、社会全体でクローズアップされてきて、だんだん人文科学に対する関心や社会的な要請というのは少なくなってきます。さらには斎藤報恩会の建物が軍に接収されるということもありまして、報恩会の活動は停滞を余儀なくされます。そうした中で小倉博も昭和十九年に没し、小倉博を助けて学芸員をやっていた片倉信光という人物も昭和十九年には学芸員を退職しているということで、報恩会における郷土史研究の活動も一時停滞をします。

それだけではなくて、昭和二十年七月の仙台空襲では報恩会の建物も大きな被害があつて、その中に納めてあつた各種の標本類、あるいは様々な書類の大部分が焼けてしまったのです。ただ幸いなことに、郷土資料の大部分は前谷地にあつた斎藤家の屋敷、それから郷土資料や標本類の一部は片倉信光の実家があつた白石の方に疎開させていて、難を逃れることができました。この疎開によって、郷土史の資料はほとんどが難を逃れたようですが、自然史資料は半分以上が失われてしまったと言われています。戦前の段階で、報恩会の所蔵資料は約三十万点と言われていたそうです。その内三分の二がこの空襲によって失われてしまったというようにも伝えられておりますので、約二十万点が残念ながら、報恩会の建物と一緒に焼けてしまった。ただ、報恩会の建物は石造りでしたので、建物そのものは残って、戦後も使われていったというような状況になります。

戦後の大きな動きとしては、常盤文庫があります。これは、戦前から郷土資料を集めていた常盤雄五郎という、そもそもは古書店の主人ですけれども、自分が扱っているいろいろな古書の中で貴重な歴史資料があるとそれは売らないで自分の手許に残していたそうです。この常盤雄五郎が集めていた郷土資料約一千点、これを戦後になって、常盤が私すべきものではないということで寄贈先をいろいろ考えた中で、当時宮城県図書館も戦災で大きな被害を受けて、随分郷土資料も焼けてしまって、そちらに行く可能性もあつたのですが、最終的にはきちんと疎開という形で郷土資料を守つたということを評価したのか、常盤の郷土資料約一千点は報恩会に寄贈され、「常盤文庫」という名称がつけられて、仙台の郷土史の重要な資料ということで、今に伝わっております。

またこの時期、後でお話をしますが、斎藤報恩会では疎開させた資料を順次戻しながら、どういったものを持っているのか目録作りを進めています。報恩会そのものは昭和二十六年に斎藤報恩会博物館ということで、新しくできた「博物館法」に則つた形での登録を行つて、昭和二十八年から展示の公開を再開しています。ただ、戦後の斎藤報恩会については、基本的には自然科学系の博物館ということで、市民の科学教育センターとしての役割を果たすという理念が大きかつたようです。ですので、郷土資料の展示ということは、新しい戦後の斎藤報恩会の方ではほとんど行われることはありませんでした。

この空襲で焼け残つた建物も、昭和五十一年に新しく鉄筋コンクリートのビルに建て替えられますが、その段階でも斎藤報恩会自然史博物館と名称が変わつたように、郷土史の展示は基本的には行われることはありませんでした。この斎藤報恩会の新しい博物館では、恐竜の化石が仙台で唯一見られるということで、非常に子どもたちには有名な場所でした。

また戦後すぐは、この斎藤報恩会の建物はアメリカ文化センターという施設に使われていた時期があり、ある年代以上、いま六十代後半、七十代の方ですかね、このアメリカ文化センターで

映画を見たりだとか、本を見たりだとかというようないろいろな思い出があるということも伺っております。そのような意味で、斎藤報恩会は戦後になっても、市民のいろいろな教育という場面で大きな役割を果たしていたということが言えます。

このように基本的には自然科学の方に大きく傾斜をしていき、新たに郷土資料を収集することも行われなくなったようですが、一時期、民営の仙台美術館というのが報恩会の一角に設置されたり、あるいは断続的ではあるのですが、考古学や郷土史といった分野への研究助成も継続して行われておりました。

さらには平成元年には仙台郷土研究会の事務局が報恩会館の中に置かれ、平成十三年には報恩会理事長の斎藤温次郎氏が仙台郷土研究会の会長に就任しています。このようなことから、報恩会が郷土史に有形無形の恩恵を与え続けていたということが出来ます。ずっと所蔵していた郷土史関係の資料についても、閲覧の制限は厳しくなく、求めがあれば状況に応じて資料閲覧の対応も行っていたようです。東京方面の財団などですと、所蔵している資料の閲覧を厳しく制限するという、我々歴史の研究をする上では厄介な財団も少なからずあるのですが、その意味では、斎藤報恩会は直接的な郷土史あるいは歴史への研究助成は、戦後はかなり薄まったとは言いながら、歴史研究、郷土史研究への理解というものは常に持っていた、と言えるのではないかと思います。

2. 郷土資料の目録

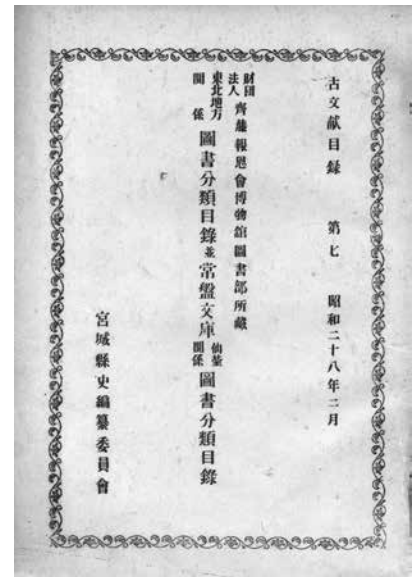
次に斎藤報恩会が集めて保存してきた郷土資料の概要についてお話ししたいと思います。

残念ながら、報恩会が所蔵してきた多くの郷土資料につきましては、空襲によって関連の書類が焼失してしまい、どういった形で収集されてきたのか、どこからの寄贈、あるいは購入した、ということが詳しくわかるという状況には残念ながらなっておりません。これは戦後すぐに目録を作ろうとした段階で、すでに分からなくなっていたそうです。ただ、今残っている資料の状況を検討すると、その内容ですとか、あるいはまとまりといったものをある程度確認をできますので、古いことを知っている人たちの伝聞などを加味すると、どういった家からまとめて入ったとかということが推測されるものが一部にはあります。また、古い新聞なんかも見ると、報恩会に資料が寄贈されたとか、報恩会が絵図を買ったとかっていうことも載っているようですので、今後そういった調査を蓄積していったら、報恩会による郷土資料の収集状況の経緯というものを明らかにしていきたいと思っています。

およそ推定されるのは、集められた郷土資料の大部分は、先ほども紹介した小倉博が昭和五年に博物館の学芸員、図書部の主任に就いてから、おそらく小倉が中心となって集めていたのだらうということです。また、先ほどもお話ししましたように、戦後には郷土資料の収集というものはほとんど行われませんでした。図書や雑誌を除けば、新しく古文書を集めるということは、先ほど紹介した「常盤文庫」約一千点を除くとほとんどなかったと考えられます。

報恩会が収集した郷土資料については、戦前は報恩会博物館で行われた展覧会で展示される他、一部の研究者による研究の利用というものは行われていました。ただどういったものを報恩会が持っているのかということがオープンになるのは、戦後のことのようにです。戦後、疎開によって空襲による焼失を免れた郷土資料や一部の図書資料については、戦後に報恩会の図書部によって、点検・整理が行われまして、『東北地方関係図書目録』（其の一）（其の二）という目録が作られました。

さらには戦後数年を経て、昭和二十年後半から新しい社会のもとで、もう一度地域の歴史、郷土の歴史を見直そうという機運が出てまいりまして、仙台市史、それから宮城県史の編纂が開始されます。そこでやはり注目されたのが、この報恩会の資料だったのです。まだ当時は仙台市博物館は存在しませんので、仙台藩主伊達家の資料は、伊達家でまだ持っていた状況です。宮城県図書館もかなりの郷土資料を戦災で焼いてしまいました。さらに宮城県図書館も今は伊達家の資料がかなりあるのですが、まだ入っていない状況でしたので、古いこの昭和二十年代に始まった仙台市史、これが開始された段階では、やはり地元の歴史を知るためには、報恩会の資料がもっとも核になるまとまった資料群だったということが言えると思います。宮城県史編纂委員会では、先ほどご紹介した報恩会自身が作った『東北地方関係図書目録』をもとにして、さらには「常盤文庫」なども含めて、『財団法人斎藤報恩会博物館図書部所蔵 東北地方関係図書分類目録並常盤文庫仙台関係図書分類目録』



『東北地方関係図書分類目録並
常盤文庫仙台関係図書分類目録』

というのを昭和二十八年に発行しています。これによって初めて、報恩会でどのような郷土資料を持っているのかということが広く明らかになったのです。この目録をもとにして、この後に本格化する宮城県史の編纂事業、あるいは郷土史家による郷土研究といったものが大きく進展したことは言うまでもありません。

その後報恩会では昭和五十年代に、再び所蔵する郷土資料の目録化を図り、昭和六十年、六十一年に『郷土資料図書分類目録』ということで、「その一」として「東北地方関係古文書目録」、それから「その二」として常盤文庫の目録を作って、発行しています。実は、先ほど見ていただいた宮城県史編纂が作った『図書分類目録』は、非常に部数が少なかったものですから、たくさんの人には行き渡らなかったのです。そのようなこともあって、報恩会ではこの新しい目録を出版したのだと思います。これによって、報恩会の所蔵している郷土資料の全体像がさらにわかりやすくなったはずなのですが、実はこの新しい目録には欠点もありまして、古文書ですとか、古い絵図だけではなくて、新しく出版された歴史関係の書籍や雑誌なども混ぜ込んで目録を作ってしまったのです。その結果、この新しい目録では昭和五十年前後に出された本と、江戸時代に出版された本が一緒に並んで載っているというような、ちょっと使い勝手の悪い状況も出てきてしまった、という不便もありました。

そのようなこともあって、平成三年に私共の博物館が、仙台市史の編さんに取りかかった際に、この新しい目録を基にしよう一回報恩会で所蔵している郷土資料を再確認しようということで、当時ようやく普及し出したパソコンを使って、資料のデータベース化などの作業を行い、平成二十六年まで行った仙台市史の編纂の中で、報恩会所蔵の郷土資料をたくさん活用させていただいたということになります。

3. 斎藤報恩会の郷土資料の概要

斎藤報恩会が保存してきた郷土資料は、公称三千点となっていますが、「一点」の中には、古

文書数十点が入っていると、あるいは日記類が十数冊で一くくりになっているということなどもあって、その整理や確認の作業を仙台市博物館で進めているところです。おそらく、総点数としては四千点から五千点に及ぶのではないかと推測していますが、一部報恩会が本町から引っ越した際に行方不明になってしまったものなどもあって、そうしたものの確認作業も行っているところです。

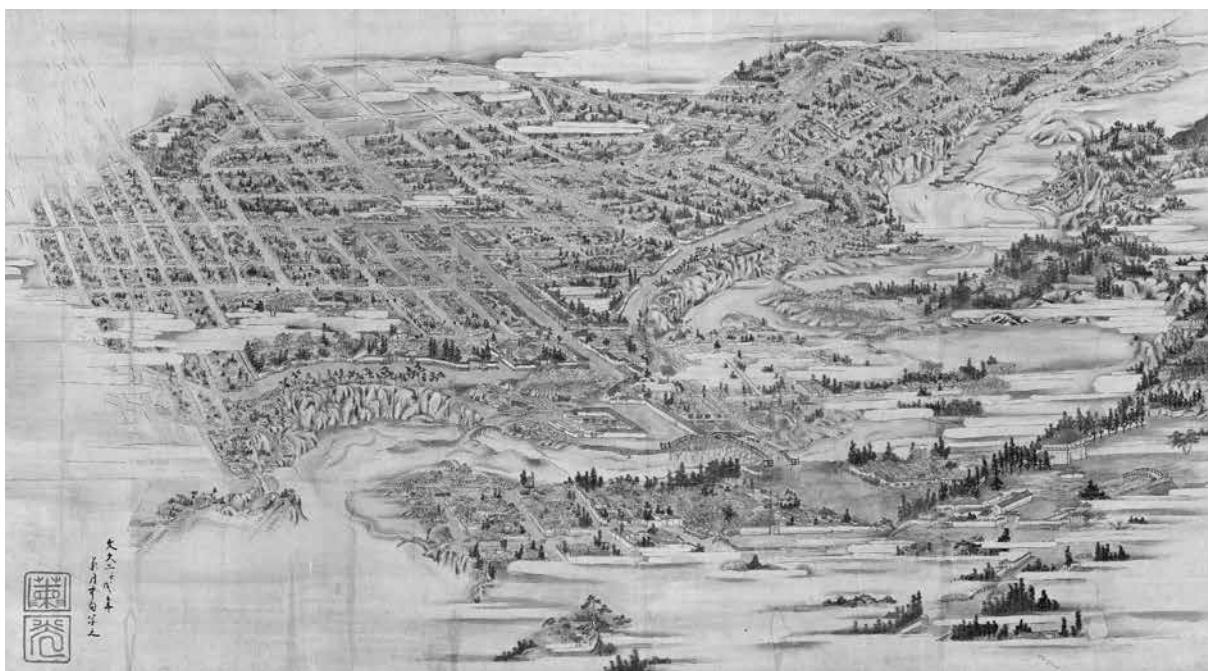
こうした報恩会の郷土資料について、ここまででざっと収集の過程などをご紹介します。次に具体的にどういったものがあるのかということ、幾つか紹介させていただきます。

①－１ 仙台北城下の絵図類

斎藤報恩会の郷土資料で目玉になるのは、なんと言っても仙台北藩関係の古い絵図資料。とくに仙台北城下や仙台北城を描いた絵図や、仙台北藩全体を描いた国絵図になります。

例えば文久二年という幕末の仙台北を描いた鳥瞰図は、仙台北を西の方からずっと見ていった図です。仙台北城下を真上から俯瞰した絵図は何種類もあるのですが、この鳥瞰図のように仙台北城下を立体的に描いたものはそうたくさんはありません。ある特定の地域を部分的に描いたものはあっても、このように仙台北城下全体を立体的に描いたものは、この鳥瞰図の数年後、明治元年の様子を描いたものが仙台市博物館にあるくらいです。

この鳥瞰図を見ていて特徴的だと思うのは、仙台北城下の道が碁盤の目状に描かれていることです。ちょっと仙台北の城下町は一部には道が食い違ったり、方向がずれたり、行き止まりの所もありますが、他の城下町に比べるとそうしたものはかなり少ない、道がきちんと碁盤の目に近い形で並んでいる所が大部分なのですね。そういった状況を、この城下絵図はしっかりと描いています。この絵を描いた人はどのような人物なのかよくわかりません。当時は飛行機とか、ドローンとかありませんので、どうやってこの鳥瞰図を描いたのかわかりませんが、ある程度自分の頭



文久2年の仙台北城下絵図

の中で、自分が空中に上がったらかういうように見えるだろうという想像で描いているのだと思いますが、この絵を描いた人、あるいは現実に城下に住む人々のイメージとしては、仙台の城下町はほぼ碁盤の目状だったという認識があったことがよくわかる絵図だと思います。

この鳥瞰図は、仙台北城下を描いたものとしては幕末の比較的新しい時期のものですけれども、これとは逆に仙台の城下町を詳しく描いた絵図としては、一番古いものも報恩会で所蔵していました。「奥州仙台北城絵図」です。この絵図は正保二年（一六四五）、政宗が没して約十年に描かれたものです。これは各藩あるいは各国で、国ごとの大きな絵図、それから城と城下町を描いた絵図、それから領内の土地台帳を提出しろという幕府の命令があって、それに基づいて仙台北藩が幕府に提出した絵図です。なぜ幕府に提出したものが報恩会の所蔵になったかは、詳しくはわからないのです。昔から言われているのは、どうも明治維新、戊辰戦争の時に、奥羽越列藩同盟を組んでいた仙台北藩や米沢藩を攻めるために、新政府軍がこの絵図を江戸城中から持ち出して、戊辰戦争が終わって絵図が不要になった後も、江戸城に戻さず、どこかの古本屋なり骨董屋なりに売ってしまったらしい、ということです。この絵図は、仙台北城下だけでなく、仙台北城を描いた絵図としても一番古い絵図ということで大変に貴重で、先ほどの鳥瞰図などと共に仙台市の文化財に指定されています。上質の紙と良い絵の具を使っているのですけれども、いかんせん三メートル半×四メートルもある大きな絵図ですから、仙台市博物館の展示室でもきれいにピシッと展示することができません。どうしても下を少したるませたりしないと展示できないのです。それから普段は折り畳んでしまわれているものですから、折り目がかなり劣化しておりまして、この後、この絵図をどのように保存していくか、いま博物館の中でいろいろ検討中です。多くの方に見ていただくということも大事なことです。博物館には資料を将来に残していくという役割もあります。その折り合いをつけるのが難しい判断になりますが、今年の春に非常に精細なデジタル画像を作製したので、今度の展覧会で展示した後は、しばらくはデジタルから出力したレプリカなどで展示や閲覧には対応し、その間にどのように修理や保存をしていくかを慎重に検討する。大きな絵図ですので、修理にもかなりの経費と時間を必要としますので、慌てずに五年、十年かけて取り組む課題と認識しています。ですので、この絵図の実物をご覧いただける機会は、たぶん今度の十一月からの展覧会を逃すとしばらくありませんので、是非仙台市博物館でご覧いただきたいと思います。

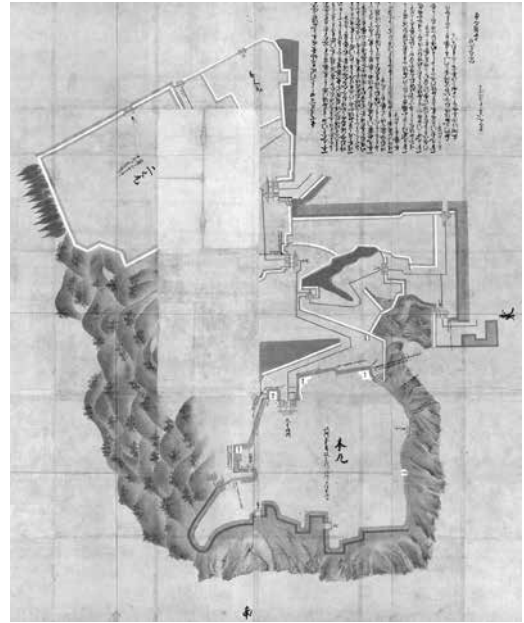
このほかにも仙台の城下絵図としては、元禄年間に作成されたものもあり、これは仙台北城下絵図としては最大の大きさを誇っています。

①-2 仙台北城の絵図類

また仙台北城を描いた絵図も報恩会では七、八点くらい所蔵していました。

その中で一番古いものは寛文九年の絵図です。ちょうど有名な伊達騒動の最中に作られた絵図です。これは、寛文八年に直下型の地震によって仙台北城の石垣、政宗の時に造った石垣が大規模に崩れたものですから、その修理を幕府に申請した時のものです。当時、城の石垣や堀を修復するときは必ず絵図を作って、どこが壊れたのかを示して「どこがどれくらい、どういふように被害を受けたので直させてください」ということを幕府に申請して、老中から「修復を許可する」という通達が来ないと直せなかった。したがって、仙台北城の修復でも必ずこうした絵図をつけて幕府に申請をするのですが、その絵図が今のところ十数点確認されています。その中でこの寛文

九年の絵図は、一番古い絵図というだけでなく、城の描写がこの後の絵図とはちょっと違ってしています。実は、私たちが作った『仙台市史』の中に「城館編」という、仙台城や戦国時代の城のことをまとめた本があって、その中で仙台城の修復のための絵図類もなるべく調べて写真を掲載したのですが、何故かわからないのですが、この寛文九年の絵図の存在を見落としてしまったのです。「城館編」ができあがって二年後くらいにこの絵図があることを「発見」して非常に悔しい思いと反省をしたという思い出のある絵図です。若干欠落している部分もありますが、とにかくこの絵図は、仙台城研究の上では大事な絵図ということが言えるかと思います。これも今度展示をしますので是非ご覧ください。



寛文9年の仙台城修復伺絵図

その他にも仙台城の二の丸の建物の図面、どういった建物があるのかというような、中にはトイレだとか井戸だとか、あるいは排水のための水回りだとか、そういうのを詳しく描いた絵図というのも報恩会収集資料の中にはございました。

①-3 仙台藩の国絵図

それから今度は同じ絵図でも仙台藩の全体を描いた、いわゆる国絵図と呼んでおります。元禄年間、西暦で言うと大体一七〇〇年頃に作られた仙台藩の国絵図が報恩会の郷土資料の中にありました。この存在はごく一部の人は知っていたようですが、ほとんど見る機会がなかったのです。というのは、この絵図は横幅が約八メートル、縦が約五メートルもあり、大きすぎて普通には展示ができないのです。

こういった仙台藩の国絵図を持っているのは、私共の仙台市博物館で、これよりも古い正保年間、さっき『奥州仙台城絵図』の説明をしましたが、それと同じ時に作られた国絵図を元禄の国絵図を作る際にその参考資料として正確に模写したものを仙台市博物館で所蔵していて、常設展示室で展示しています。ただし資料保存の関係で、通常展示しているのはレプリカで、実物は四、五年に一度くらいのペースで展示をしています。

それから、宮城県図書館にも報恩会の国絵図と同じ元禄年間の国絵図があります。図書館の方でもやはり展示するスペースがないので、一般の方々や我々でもこれを見る機会ほとんどありません。私も実物を見たことはありません。

今回、報恩会に元禄の国絵図があることがハッキリわかって、県の図書館にある元禄の国絵図とどのような関係になるのか、博物館の学芸員がいろいろと調べています。どうもこれは幕府に提出した時に、仙台藩で控えを二つ作って、その一つが県図書館、もう一つが報恩会に伝わった、ということのようです。

仙台藩は、重要な書類などについては控え、もしくは写しを二つ作っていることがあるようです。おそらく一つは仙台に置いて置き、もう一つは江戸屋敷に置く、そういうことをしていたの

ではないかと推定しています。例えば、將軍の代替わりの時に伊達家に六十二万石をあげますよという証明書＝判物をもらうのですが、これも本物があって、本物の他に写しが二つあるのです。それから仙台藩の公式歴史書で歴代の藩主のいろいろな事跡や出来事を年代順に書いた『治家記録』も、一部欠けているものもあるのですけれども、二種類ある。

実は元禄の国絵図は、県の図書館にあるのはそれなりに知られていたんですね。報恩会にも目録の上では元禄の国絵図があるということはわかっていたのですが、だれもちゃんと調べたことは無く、県図書館の国絵図との関係は考えてこなかったんですね。今回、仙台市博物館に寄贈されて、改めて確認したらこれはなかなか良いものだということがわかりました。県の図書館のものは、かなり傷んで色が剥がれている。それに比べると、報恩会にあった元禄国絵図は、保存状態が良く、色も綺麗に残っています。ですので、この元禄の国絵図も今度の展覧会の目玉資料なのですが、やはり大きすぎて展示できない……。それで、縮小したレプリカを作って床に敷いてしまって、上から見ていただけるような工夫をすることになっています。

実は元禄の国絵図は、元禄十二年に作って幕府に提出したのですが、幕府から修正を求められて元禄十四年に作りなおして幕府に再提出しています。この元禄十二年と十四年の両方の国絵図を県図書館でも報恩会でも双方ともに持っているのですが、報恩会の国絵図は、元禄十四年のものは大きいままなのですが、元禄十二年のものは紙の継ぎ目に応じてバラバラになっています。そこで、元禄十四年のものは床置きレプリカで展示し、バラバラにされた元禄十二年の国絵図は、何点かを今回展示をする方向で準備しているところです。

こういった絵図類は、他にも村の絵図や、町の絵図、海岸の絵図だとか、いろいろなものを報恩会では「所蔵していました。全てを今回の展覧会で展示することはできないので、博物館の常設展などで機会を見ながら、少しずつでも活用していきたいと考えているところです。

②戦国時代の文書類

もう一つ、斎藤報恩会の所蔵資料で全国的に注目されていたのが、戦国時代の古文書です。伊達政宗の父親・伊達輝宗の重臣に遠藤山城守基信という人物がいて、この人が伊達家の外交担当の家臣だったんですね。全国のいろんな大名から手紙をもらっており、その中には織田信長や徳川家康の書状も含まれています。この「遠藤山城文書」は非常に状態が良く、本当に四百数十年前に書いたのかと思うくらい、紙がピカピカなんです。「遠藤山城文書」は三十数通あるのですが、その内今回は十点左右を展示しますので、是非、実物を見て、その状態を確認いただきたいと思います。また、理由は分からないのですが、「遠藤山城文書」の中には織田信長宛ての手紙も何通か入っているんですね。それも含めて、どれもこれも状態が良い貴重なものですので、是非ご覧ください。

戦国時代の古文書としては「遠藤山城文書」のほかに「古文書集帳」と言って、斎藤報恩会が集めた古文書を戦前の段階で台紙に貼り付けたものがたくさんあり、これも貴重なものとなっています。例えば、葛西晴信という今の宮城県や岩手県南の北上川流域や三陸沿岸部を治めていた戦国大名がいます。この戦国大名葛西氏の古文書は偽物が多いので有名なのですが、報恩会の「古文書集帳」にある葛西晴信の古文書は紛れのない本物で、貴重なものです。また、伊達政宗の重臣として有名な伊達成実の手紙も含まれています。成実の出した手紙はそんなに数があるわけではなく、結構めずらしいものです。それから政宗の命令書。藩に借金をした家臣で藩にさっぱり

返さないのがいるが、そうした連中に対してはいついつまで期限を切って、それでも返さないやつからは、知行を召し上げてしまえ、と命じたものです。政宗の手紙はたくさんあるのですが、こういった命令書はそんなに数は多くはありません。いま紹介したものなども今回の展覧会で展示する予定になっています。

③仙台藩政関係資料

その他、報恩会には仙台藩関係の資料が紹介しきれないくらいたくさんあります。

他の藩でもそうなのですが、仙台藩では、藩の役人になった人が、後々自分の子どもだとか、関係者が役に立つようにということで、勤務の記録や藩の法令、案件の記録やいろいろな書類の控え等、たくさんの記録を書き残しています。

また藩の記録というわけではないのですが、政宗が仙台城を造った時に、城と城下町をつなぐ仙台橋という橋を造ったのですが、その橋の欄干に付けた銅製の擬宝珠が報恩会で持っていました。これは大正時代に河原町近くの辺りの畑の中から掘り起こされたもので、これも市の文化財になっているものです。この擬宝珠には、「川の流れはずっと変わらないように、仙台の町もずっと繁栄するように」なんていう銘文が刻まれていて、仙台城下に込めた政宗の思いが今に伝えられているのです。



仙台橋の擬宝珠

こういうものも含めた仙台藩の藩政関係の資料というのが、報恩会の資料にはたくさんあって、仙台市史や宮城県史を含めて私たち仙台のことを調べる上での重要な資料になっています。まだまだ調べつくされたわけではなく、今後こうした資料をさらに研究することによって、新しい事実が見つかることも十分に考えられるのです。

④仙台藩士関係資料

他にも仙台藩の家臣の資料もたくさんあります。

ある程度まとめたものとしては、玉虫家のもの。二百石くらいの中級家臣で、町奉行をやったりした家で、日記が百冊以上残っています。それから江戸時代後期から幕末にかけて、藩の役人として、非常に優秀な人物として知られていた荒井東吾宣昭と人がいるのですが、この人の記録ですとか、あるいは今風に言えば様々な研究論文というのですかね、そういった著作類のまとめたものがあります。それから、幕末に養賢堂の教授、そして武術家、勤王家として知られた桜田良佐という人物がいます。これは、東北の勤王家として清河八郎という、庄内地方出身の浪士で全国的に有名な人がいるのですが、桜田良佐はこの清河八郎と親交があったということでも知られております。この桜田良佐の日記や著作類も数十冊がまとまって報恩会に残されています。

⑤奥浄瑠璃関係資料・⑥俳諧関係資料・⑦飢饉関係資料

他にも「奥浄瑠璃」と言って、仙台藩領一帯で行われていた古い語り物の芸能があります。「御

国浄瑠璃」とも呼ばれることがあり、残念ながら今は途絶えてしまっていますが、この奥浄瑠璃で演じられる物語を筆写した冊子がまとまっています。

また、江戸時代に仙台藩内などでも盛んであった俳諧。これは現在の俳句のもとになるものです。江戸時代に仙台をはじめとして東北地方でも俳諧に関する句集が盛んに作られますが、報恩会にはこうした句集もまとまった数があります。

こうした奥浄瑠璃や俳諧に関する資料は、小倉博が集めたものだと思います。

そして、阿刀田令造が集めた東北地方における江戸時代の飢饉関係資料といったものもたくさんまとまって存在しております。

ここで簡単に紹介したものについても、代表的なものを今度の展覧会ではご覧いただけるように、資料の選択や展示の準備を進めているところです。

4. 斎藤報恩会の郷土研究を支えた人々

ざっと斎藤報恩会の郷土史に対する役割、あるいは報恩会が集めてきた資料の概要を紹介してきました。最後は、この報恩会の中で、あるいは報恩会と関係した形で郷土史に関わって、現在私たちが郷土史を研究する上で、大きな影響を今でも残している人物を何人かご紹介したいと思います。

①小倉博（一八七七—一九四四）

まずは小倉博です。先にも簡単に紹介しましたが、一八七七年から一九四四年、昭和十九年に亡くなった方です。この人の父親である小倉長太郎は茗園とも呼ばれていて歌人としても知られていますが、その小倉長太郎の三男です。東京帝国大学で国文学を学んだ後に、地元の仙台に戻ってきまして、第二高等学校、旧制二高ですね、その教授、それから宮城県第二高等女学校、今の二華高ですね、こちらの校長、そして東北帝国大学の助教授を歴任した後で、斎藤報恩会に勤務しまして、先ほどもお話ししたように、学芸員あるいは図書部の主任ということで、郷土資料の収集や研究にあたってきた人物です。



小倉 博

この小倉博は展示や研究だけではなくて、報恩会の庶務的な分野にも随分手腕を振るったようです。昭和十五年からは、庶務部長という地位に就き、事務仕事の方面の責任者にもなっていました。

私からすると、小倉博はやはり郷土史研究家としてのイメージが強いのですが、もともとは父親の影響を受けて歌人でもありましたし、国文学の研究者といった面でも、多くの業績を残している人なのです。郷土の俳人、あるいは奥浄瑠璃の研究といったものは、国文学研究と郷土史研究が融合して結実したものということができるでしょう。

ちなみに、先ほども紹介しましたこの小倉博の兄弟というのは、長じた兄弟全員が東京帝国大学を卒業するという非常に優秀な人たち揃いで知られていました。上から順番に挙げると、博が長兄で、ついで言語学の小倉進平、海洋学で海軍に勤めた小倉伸吉、地質学者の小倉勉と続きます。その次の強は建築学や建築史を修め、斎藤報恩会館の設計をしたことで知られています。そ

して末弟が植物学の謙となります。この兄弟は「小倉六兄弟」などと呼ばれて仙台だけでなく、全国的にも知られた一家でした。日本ではこのような有名な学者兄弟として、京都の「小川四兄弟」もあります。ノーベル賞を取った湯川秀樹が三男で、長兄が冶金学者の小川芳樹、そして中国史の貝塚茂樹と中国哲学の小川環樹という四人兄弟でした。西日本の「小川四兄弟」と並び称されたのが仙台的「小倉六兄弟」だったのです。

なんといってもこの小倉博が報恩会にいたからこそ、本当にたくさんの郷土資料を集めることができたし、その人脈の中で、仙台的郷土研究が大きな進歩を遂げたということが言えるのです。

②阿刀田令造（一八七八—一九四七）

この小倉博と親交があったのが、阿刀田令造です。一八七八年生まれで一九四七年、昭和二十二年に亡くなった方です。名取郡下増田村、今の名取市の旧家の出身で、父親は村長などをやったりもしています。阿刀田令造もやはり東京帝国大学で西洋史を学び、さらに京都帝国大学の法学部で法律の勉強もしたそうです。その後仙台に戻って、第二高等学校の教授となって教鞭をとっております。何といってもこの阿刀田令造については、大正の後期から昭和初期にかけて、仙台における郷土研究のリーダー格と言ってもいい人物であることを忘れてはならないのです。仙台的郷土研究会の主要メンバーとして活躍し、斎藤報恩会の助成なども受けながら、仙台城下絵図や飢饉資料の収集や調査、研究を精力的に行っています。

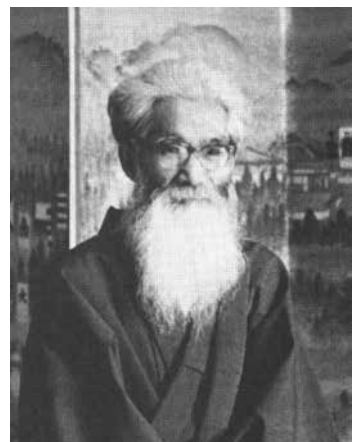


阿刀田 令造

この人は、我々からすると、郷土史研究の面で多くの業績を残した人物というイメージが強いのですが、それだけでなく、社会教育に対する関心もかなり高く、先ほど紹介した報恩会の講堂を使って市民向けのいろいろな講座の企画をしたり、自身で話をしたりということを盛んに行いました。そういった経歴もあって、第二次世界大戦後に仙台市で公民館をつくる時に、仙台市では阿刀田令造に初代館長の職を委嘱をしているのですが、残念ながら本格的な活動に入る前に早くにお亡くなりになったのです。

③片倉信光（一九〇九—一九八五）

最後に紹介するのが片倉信光。我々は「かたらしんこうさん、しんこうさん」というように親しみを込めて呼んでいるのですが、伊達政宗の側近として知られた片倉小十郎景綱の直系の子孫にあたる人物です。この人は国学院大学で古代史、それから考古学を学び、仙台に戻ってきて、昭和十三年から十九年の間、報恩会の博物館で勤務をして、小倉博を助けたのです。小倉博はこの時期になると総務部長という職にも就いていますので、かなりの部分、実はこの片倉信光がいろいろ仕事をしたことは間違いありません。



片倉 信光

片倉信光は、報恩会で活動するだけではなくて、白石地方の郷

土史研究にも非常に力を注ぎ、昭和十五年に奥州白石郷土工芸研究所というものを創設して、その所長になっておりますし、後には昭和十七年には青葉神社の宮司も兼ねたのです。また戦後には、白石市史編纂委員、白石市の文化財保護委員ということでも白石地方の文化財保護や郷土研究に力があつたのです。とくに白石和紙の研究や保存、技術の伝承ということに非常に力を尽くしたことで知られている人物です。

まとめ

ここで紹介した小倉博・阿刀田令造・片倉信光が、斎藤報恩会の力を受けながら、あるいは斎藤報恩会を動かしながら、郷土資料の調査、収集をしたからこそ、実はいま私たちが仙台藩の研究、あるいは仙台の城下町などの研究ができるということを、改めて今回、報恩会から資料をご寄贈いただき、その記念の展覧会を準備する段階で、思いを新たにしたところです。

ということで、十一月十一日から仙台市博物館で斎藤報恩会からご寄贈いただいた中から選りすぐりの資料を展示いたしますので、是非お出かけいただきたいな、と思います。期間中には、記念講演会や展覧会を担当した学芸員による講座、伊達武将隊とコラボしたイベントなども企画しておりますので、たくさんの方にご参加いただければと思います。この機会に、博物館を一度と言わず、二度、三度ご来館来ていただいて、報恩会の集めた資料、それから報恩会の九十年にわたる業績というものを、再確認をしていただきたいと思いますという次第です。

以上で私のお話を終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。